



C-01 アレルギー性肺疾患

きかんしぜんそく

気管支ぜんそく

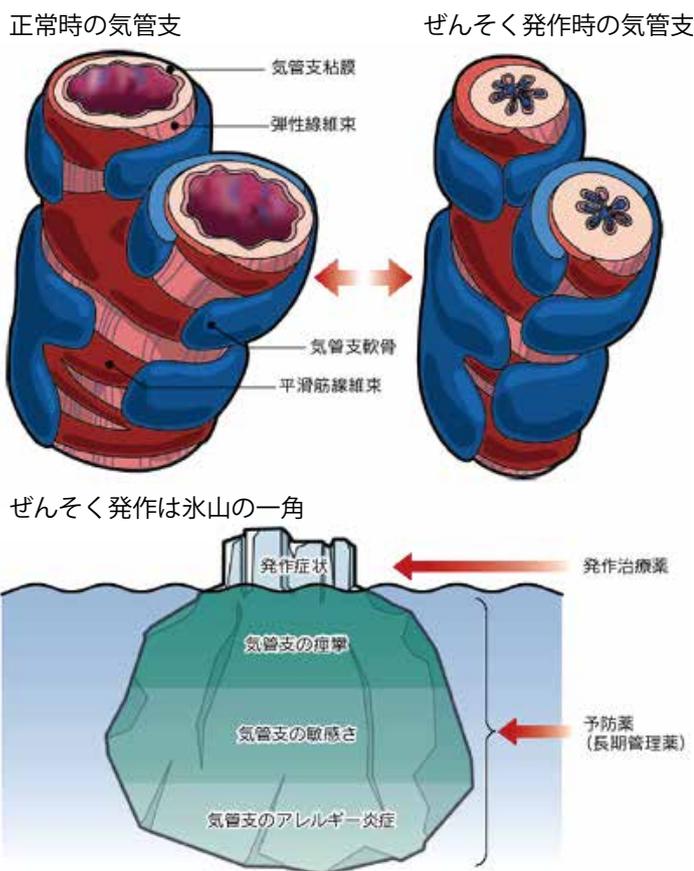
【概念】

気管支ぜんそく(喘息)は、気管支に炎症が続き、さまざまな刺激に敏感になり、空気の通りみちが狭くなる病気です。我が国では小児の5~7%、成人では3~5%が罹っています。高齢になって初めてぜんそくになるかたもおられます。ぜんそくの炎症はダニやハウスダスト、花粉、ペットのふけなど日常生活のありふれた物質に対するアレルギーが関わっていることが多いのですが、成人の

ぜんそくではアレルギーの原因物質が特定できないこともあります。

【症状】

炎症によって気管支の壁がむくんで、粘り気の強いたんが増え、さらに気管支を取り囲んでいる筋肉が収縮して気管支を狭くします(資料1)。せきやたんが出やすくなり、ゼーゼー、ヒューヒューという音(ぜんめい、喘鳴)を伴って息苦しくなります。このような状態をぜんそく発作と呼びま



資料1

す。日頃は何ともなくてもかぜをひいたり、激しい運動をすることで発作が生じます。発作の程度が強いほど、また発作の頻度が多いほど炎症が強いことを反映しています。

【検査】

上に示したような症状が繰り返し起これば、ぜんそくの可能性があります。呼吸機能検査で気管支の空気の流れが悪くなっていないかどうか調べます。流れが悪い場合、気管支拡張薬というスプレーを吸って流れが改善するようであれば、ぜんそくの可能性が高くなります。たんの検査でぜんそく特有の炎症がないかどうか、また血液検査でアレルギーの体質がないかどうかも参考になります。

【治療】

発作がないとぜんそくは治ってしまったように思われるかもしれませんが、ぜんそくの原因とな

る気管支の炎症は続いています。炎症が続けばいずれまた発作が起こります。したがって、日頃から炎症をおさえる治療(予防薬)をおこなうことが大切です。その治療の主役がステロイドの吸入薬です。ステロイドは長期服用すると様々な副作用を起こすことが知られていますが、吸入で用いる場合は副作用も少なく安全です。ぜんそくの重症度に応じて気管支拡張薬とよばれる吸入薬や内服薬を追加することもあります。アレルギーの原因物質が判っている場合は、できるだけそれを避けることも大切です。喫煙はぜんそくを悪化させやすく、薬の効果を低下させるので禁煙しましょう。いったん、発作が起こったら即効性のあるスプレータイプの発作治療薬を吸入します。何度か繰り返し吸入してもすぐに発作がでようなら、速やかに病院を受診してください。

MEMO

日本呼吸器学会では学会ホームページにて「市民のみなさま向け」に様々なコンテンツを公開しています。ぜひご覧ください!



呼吸器の病気

Respiratory disease

『疾患別』に症状や、診断・治療方法を解説しています。

呼吸器

Q&A



『症状から』対応方法などをQ&A形式でお答えします。

※ここに書かれている内容は、あくまで一般的なものであり、必ずしも貴方の病気にあてはまらない事もありますので、この内容を参考にし、呼吸器の専門医の診察を受けてください。

日本呼吸器学会
ホームページ

www.jrs.or.jp/